



## 一 事件 1

---

もうだめだ。

明日香は立っていられなかった。お客さんの前だから、ホテルの部屋を出るまでは何とか持ちこたえていたけれど、部屋を出た途端、緊張の糸が切れたのか、ホテルの廊下に這いつくばってしまった。

胃から、喉から、口から何かが噴き出してきそう。それを我慢する。右手で口を覆いながら、四つん這いならぬ、三つん這いで廊下を這う。やっとの思いでエレベーターの前に到着した。

「エレベーターをご利用されますか」

エレベーターの前の監視カメラが明日香の方を向いた。だが、しゃべれない。もし、万が一、しゃべろうとすれば、食道や胃、小腸など内臓が口から飛び出してきそう。エレベーターの前で壁にもたれて座りながら、左手で指を下に向ける。

「下ですね。しばらくお待ちください」

不幸な状況に陥りながらも、幸運なことにエレベーターはすぐに到着した。

誰かが乗っているかもしれない。こんな無様な姿を誰かに見られたら、消防や警察に通報されてしまう。そうすると、お店に迷惑をかけてしまうかもしれない。それだけは何とか避けたい。それに、このことはお店に、同僚に伝えなければならない。

遠のいたり近づいたりする混濁した頭の中で、責任感が強いのか、それだけは強く意識していた。

「どうぞ、お乗りください。ご利用ありがとうございました」

エレベーターのドアが開いた。中に誰かがいるのかを確かめたかったものの、頭が割れるように痛いため、それどころではない。まさに、脳みそが破壊され、その汁が鼻から、耳から、口から、顔の汗腺から垂れてきそう。

多分、それは心が壊れたから、心を食いつぶされたからではないだろうか。それでも、この醜態だけは他の誰にも見せられないと、無理やりに頭を持ち上げた。

「どうぞ、お入りください」

今度は、エレベーターの箱の中から声がする。明日香は顔を上げる。誰かが乗っているのか。誰もいない。ガラス張りのエレベーターから、遥か彼方に見える山と近くに聳える摩天楼が見えた。空は限りなく青く、その青の中に空間を突き抜けた白い雲が浮かんでいる。いや、雲は微動だにしていない。浮かんでいるというよりも青い板に白い折り紙が張り付いているように見える。

「大丈夫ですか」

エレベーターの箱の設置された監視カメラが明日香の方に動いた。

「大丈夫。ちょっと転んだだけ」

気分是最悪なのに、言い訳だけを何とか取り繕う。このホテルにはお客様の部屋の中以外には至る所に監視カメラが設置され、それぞれにAIが搭載されている。ホテル内のお客様などに危険があれば、すぐに受付に連絡される。そして、受付から、人間又はロボットのガードマンが訪れることになっている。ホテルの宿泊者にとっては安全・安心が保障されるシステムだ。

だからこそ、エレベーターの監視カメラに不信感を持たれてはならない。明日香は扉に掴まりながら立ち上がる。そのまま背中をガラスの壁に付け、滑るようにして中に入る。明日香が中に入ったのを確認して、エレベーターの扉が閉まった。

「どちらにまいりましょうか」

エレベーターの箱が尋ねてくる。

「一階を・・・」

お願いします、とまで言葉が続かなかった。明日香は眼をつぶった。とてもじゃないけれど、眼を開けていられない。インフルエンザを発症して、四十度以上の高温の熱が出てベッドに倒れこんだときがあるが、そんな時とは比べようもないきつさだ。壁に何とかもたれて平衡感覚を保っているけれど、エレベーターの箱ごといつ崩れ落ちても不思議ではない。

「一階に到着しました。目的地です」

エレベーターの扉が開いた。あつと言う間だった。確か、明日香がいた部屋は六十階だったは

ずだ。それが、一瞬で、耳鳴りもせずに到着した。いや、一瞬ではなかったかもしれない。また、耳鳴りはしたかもしれない。あまりのへどが出そうな気分のため、明日香の意識がそれを感じなかっただけなのかもしれない。

「ありがとう」

監視カメラに礼を言うなんて必要はなかったのだろうが、思わず口から出た。目を開けたり、つぶったりしながら、壁にすがりながらいつもの通用口の方に進む。

「大丈夫ですか」

警備室に駐在するロボットから心も配の声を掛けられる。傍目から見ても、それほど、異様な、異常な行動なのだろう。

「大丈夫」

反射的に相手の言葉を繰り返した。だけど、本当は大丈夫じゃない。本能的にその言葉口から出ただけだ。そこまで自分が勤務する会社を守りたいのか。自分の仕事を守りたいのか、いや、そうじゃない。ただ他人に対して自分の醜態を見せたくないだけだ。

「もう少し。もう少し」

うわごとのように呟きながら、斜め四十五度に傾いた姿勢で、しかも右足と左足を交差させながら歩いた。こうしないと前に進めないのだ。通用口の扉が開いた。目の前には会社の車が止まっていた。運転手のロボットがいつものように扉を開けて待っていてくれる。

「お疲れさまでした」

運転手が感情のない、安らぎの声を掛けてくれる。さっきまでは、明日香がお客さんに対して安らぎを与えていたのだ。その結果がこの無様だ。だが、果たして、明日香はお客さんに安らぎを与えることができたのか。自分で自分を傷つけただけではないのか。でも、何故？お客さんはあたしに何を求めていたのだろうか。あたしの傷があらわになっただけではないのか。そんな疑問が生じたまま、明日香は送迎車の後部座席の中に倒れこんだ。

「ヘッドフォンを。ヘッドフォンを」

右手を伸ばす。ヘッドフォンの線を掴んだ。

「ああ」

明日香の首はがくっと折れた。

[A 5 0 0 1 番。A 5 0 0 1 番。どうしたんですか]。

運転手は体を正面に向けたまま、首だけを百八十度回転させる。だは、既に、明日香は白目を剥いたまま、息が止まっていた。

ハートケア士は、地球の人類だけではなく、他の惑星から地球を訪れた異星人に対しても、同じように心を癒すことができる。それを知ってか、最近は、同じ地球人よりも他の惑星の異星人からの指名が増えている。

確かに、心の傷や仕事の疲れなど、ハートケア士は相手の心の傷などを追体験することで、通常の姿に戻すことはできる。だが、自分がこの仕事をしていながら、こう言うのも変な話だが、ここにお客さんたちは一体何を求めて来ているのだろうか。わざわざ、この場所に来て、お金を支払い、時間を共有し、そして、別れる。再び出会うこともあるかもしれないが、二度と出会うこともないかもしれない。いや、お互いに出会いたくもないかもしれない。

お客さんの方は自分の素性をあまり知られたくないから、別の相手を求めたがる。お店の方もお客さんと指名されたハートケア士とのトラブルを恐れて、原則は、他のハートケア士に対応させる。それこそ、一期一会だ。

だが、お客さんの希望で、最初に指名を受けたハートケア士に対応させるときもある。お客さんにすれば、一回、時間を共有したことで安心できるのだ。そして、安全なのだ。ハートケア士の側にしても、全く知らない初めてのお客さんよりも、気心が少しは分かっているお客さんの方がやりやすい。やりやすい分、相手の心を癒しやすくなるのだ。

ただし、相手が凶に乗って、嫌な要求をしてくるお客さんもいる。そんな場合には支配人に事情を説明し、次回から、指名されても断ってもらえる。それで、お客さんがこの店から離れても、店はお客よりも美里たちハートケア士を大事にしてくれる。

また、ハートケア士はお客さんの要望を受けて、様々なコスチュームに着替えることができる。お客さん側としては、自分の心を全てハートケア士にさらすことになるため、どうしても躊躇し

てしまい、心の傷などを一部隠してしまいがちになる。それでは、ハートケア士に依頼した意味がなくなる。十分なケアができなくなる。お客さんには不満しか残らない。

そのため、店側は、お客さんの心をさらけ出す障害を少しでも低くするため、お客さんの要望であるコスチューム、つまり、赤ちゃんずきんや白雪姫などの姿になって、お客さんの心を開放させやすくしている。

ただし、美里たちハートケア士がコスチュームを選ぶこと、コスチュームが決まっているわけではない。先ほど言ったように、お客さんとハートケア士が必要以上に親密にならないように、原則、お客さんが依頼してきた順番で、ハートケア士を派遣している。

そのため、美里たちは店の指示に従い、今日はかぐや姫、明日はクレオパトラ、あさってはシンデレラと、コスチュームを変えていく。当然、お客さんたちも、美里たちハートケア士を特定することは不可能になってくる。

それは、お客さんたちも十分に承知している。お客さんたちも、特段、誰か特定のハートケア士を求めているわけではなく、人魚なら人魚、アルプスの少女ハイジならハイジと、既成の登場人物を求めているのだ。だからこそ、美里たちはお客さんの要望に応じて、時にはジャンヌ・ダルクにも、時には楊貴妃の姿になって、お客さんの心を癒すことになる。

ただし、それができるのも、わずか一時間の話だ。それ以上、続けるとハートケア士の心が持たないのだ。お客さんの負の心を全面的に受け入れるハートケア士は、見た目は華やかで、かつ、童話や物語に登場する人物に変身するのは滑稽なことかもしれないが、実は、精神的には重労働なのである。

そのことを、お客さんも知っている。知っているからこそ、この一時間の間に、自分の思いを美里たちにぶつけるのだった。美里たちはそれを受け止める。何も批判しないし、愚痴も言わない。そのまま受け止めるだけだ。お客さんたちは、思いを、感情を、怒りを、憎しみを、哀しみを、あらゆる感情を美里たちに放出することで、この社会で受けた傷や猛りなど癒すことができる。そして、明日から、また、日常に戻って行けるのだ。

美里たちは、そう、傷癒し人なのだ。ただし、お客さんの傷が癒える分、美里たちの傷は深くなる。立ち上がれなくなる。そういう意味では、美里たちは傷負い人なのかもしれない。

お客さんたちにも、美里たちにも未来はあるのか。単なる、一時的な、逃げ場ではないのではないか。だが、人は、生き物は逃げ場があるからこそ生きられるのかもしれない。美里たちは、からからに乾いた広大な砂漠の中をオアシスなのだ。砂漠を放浪し、疲れて、傷つき、世界を

灰色としてしか見えなくなった人々が、一時的だが、灰色の中に緑色の砂粒もあることを知るのだ。

旅人たちは、束の間の疲れを癒し、そして、残念ながら、再び、傷つくことは知っていながらも、精神的に、酷暑で、渇きで喉を掻きむしりながら、世間という砂漠に一步を踏み出していく。

何のために。それは、生きるため。生きるということは前へ進むこと。そして、人々は砂漠の環境に耐えながら、次のオアシスがあると期待しながら前へと向かうのだ。道半ばで倒れる者もいるだろう。動けなくなる者もいるだろう。そうした人々は、自己責任という名前の下で、見捨てられる。そう、生きていれば、生きていれば。何とかなる。

それは、お客さんたちだけではない。美里たちハートケア士も同じだ。いつも青々とした緑を誇っているオアシスではない。いつも、なみなみと水が満ち溢れている泉ではない。お客さんたちにそう見せているだけだ。本当のところを言えば、緑は枯れ果てて茶色と化しており、泉は熱風にさらされた乾いた窪みでしかないのだ。

それを隠すために、小野小町の姿にもなるし、マリー・アントワネットの姿にもなるのだ。いや、ならないといけないのだ。美里たちも、お客さんと同様に生きている。どんなにボロボロになろうが生きている。死なない限りは生きているのだ。生きていくのだ。

美里はこの仕事を続けながら、そう決心した。